# 初版『資本論』「価値形態」の研究(2)

尼　寺　義　弘

さて『初版』は相対的価値の「量的側面」の考察を終えて，つぎに「質的側面」の，「形態」の分析へ向かうのである。

まず二つの商品の「等価性の表現（der Ausdruck der Aequivalenz)」，たとえば，x量の商品A＝y量の商品B　または，20エレのリンネル＝1着の上着　が相対的価値の単純な形態として取りあげられる。

### I．相対的価値の第1の，または単純な形態

I．は「付録」および『第2版』以降の『現行版』でいう「単純な価値形態」〔以下，形態I，と略す〕を論究している。その叙述形式は，「付録」および『現行版』にみられるように，各構成要素に截然と区別されてはいない。形態Iは，「付録」では　§1.から　§9.まで，『現行版』では　1.から　4.まで「見出し」によってはっきりと区分けされている。さらに区分けされたそれぞれがまた「小見出し」によって細かく規定されている。だから理論の位置づけもその展開も「本文」に比較してきわめて理解しやすく工夫されている。

『初版』「本文」の形態Iは15のパラグラフから成っているのであるが，その区分けが全くなされていないのである。「見出し」も，それによって示される理論の位置づけも，「移行規定」もないのでその理解はきわめて困難である注1)。エンゲルスの述べるように，まさに「疔に脳まされた痕跡を帯びている」注2)のである。

注 1)「本文」は叙述の仕方からのみではなく，理論内容からみても，「付録」ならびに『現行版』に較べておそろしく難解である。それは展開において明らかとなるであろう。

注 2) *Engels an Marx, Brief vom* 16.6. 1867., M-E-W, Bd. 31., S. 303.

以下において各パラグラフを逐一検討する。〔(1)～(15)と各パラグラフごとに記号を付しておくことにする。〕

(1)　このパラグラフは「価値の表示形態」の分析の端初をなしている。

「この形態〔20エレのリンネル＝1着の上着（x量の商品A＝y量の商品B)〕は，単純であるがゆえに，分析するのがいくらか困難である。それに含まれている異なった諸規定はおおい隠されており，未展開であり，抽象的であり，したがってまた，若干の抽象力を働かせることによってのみ，区別され確保されることができるのである。」

相対的価値の単純な形態は，のちにみるように，具体的形態である貨幣形態から抽象・分析されたものである。形態Iは貨幣形態の萌芽をなしている。だからその形態を構成する諸規定は潜在的であり，いまだ顕在していない。諸規定は「未展開」であり，「抽象的」である。だから，「原注(16)」に述べるように「それ〔形態I〕は，いわば細胞形態（die Zellenform）であり，あるいは，ヘーゲル流に言えば，貨幣の即自（das An sich des Geldes）である。」

細胞形態の分析は，『初版』序文でも述べているように，なかなか困難である。その分析のためには「抽象力（Abstraktionskraft)」注)を発揮しなければならない。ここの文章および注は「付録」および『現行版』では削除されている。

ところで，1商品の単純な相対的価値の形態

注)「若干の抽象力」とマルクスは述べているが，これは抽象力を集中的に緊張させてこそはじめて価値形態は理解されるということであろう。

無断転載禁止。

は1商品と他の1商品との関係において表現されるのであるが，「20エレのリンネル＝1着の上着　であろうと，20エレのリンネル＝x着の上着　であろうと，形態は依然として同じである，ということだけは一見して明らかである。」

すなわち，20エレのリンネルが多くの上着に値しようと，少ない上着に値しようと，リンネル商品の相対的価値の「形態」は同じものである注)。

『現行版』では，さらに一歩すすめて，この量的関係は二商品が　＝　（イコール）として等置されることから，リンネルも上着も価値量としては「同じ単位（derselben Einheit）の諸表現」（*Das Kapital*, Bd. I., S. 64.）であり，「同じ性質（derselben Natur）の諸物」(Ebenda）であるということを述べている。すなわちつぎの通りである。

「リンネル＝上着　が等式の基礎（die Grundlage）である。」(Ebenda)

『現行版』はここで価値形態と価値実体の関係を，今一度，読者に想起させているのである。この点は「第二版後記」でも述べているように，『現行版』の第一節で交換価値の表現される諸等式の分析から「価値の導出」（Ebenda, S. 18.）が一層厳密にされた点と直接に結びつくものである。S・ベィリーはこの重要な点に全く気づかず，量的関係にのみ関心をもち価値形態について何らの成果もあげることができなかったのである。

(2)　リンネル商品は，使用価値としては薄手のものは洋服地として，厚手のものはホースや天幕をつくるためのものとして用いられる。リンネルは木綿が普及するまでヨーロッパでは主要な衣料用織物であった。こうした衣料用品として役立つという「使用価値すなわち有用物の姿」で登場する。それは自然形態であり，「価値形態の正反対物」である。とすればリンネル商品はどのようにして自分の価値存在（Werthsein）を表示するのか？

「リンネルは自分の価値存在を，さしあたりはまず，リンネルが自分に同等なもの（ihr Gleiches）としての他商品・上着に自分を連関させる（sich……bezieht）ことによって示すのである。」

リンネルは上着に対して能動的に働きかけ，価値としての関係を結ぶのである。イニシアティブはリンネルにある。だから「もしリンネルがそれ自身価値でないならば，リンネルは価値としての・自分に同等なものとしての・上着に自分を連関させることはできないであろう。」

上着がリンネルと同等なもの，価値あるものとなるのは，リンネルによる上着に対する価値としての働きかけがあるからに外ならない。

さてつぎに価値表現のメカニズムとも言うべき重要な叙述があるので長文であるが引用する。〔(a)〜(c)は便宜上つけたものである一引用者〕

「(a)質的に（Qualitativ）リンネルは自分に上着を等置するのであるが，そうするのは，リンネルが，同種の人間労働の・すなわちそれ自身の価値実体の・対象化としての上着に自分を連関させることによってである。そして，リンネルが自分に，x着の上着ではなくて1着だけの上着を等置するのは，リンネルが単に価値一般であるだけではなくて一定量の価値であり，しかも1着の上着が20エレのリンネルが含んでいるのとちょうど同じだけの労働を含んでいるからである。(b)リンネルは，上着にたいするこの連関（Beziehung）によって，一石で何鳥を

注) マルクスは，ここで明確に述べているように，二商品の量的関係にかかわりなく相対的価値の「形態」は同じものであるとしている。この「形態」に含まれる内実の分析こそ重要なのである。したがって，宇野氏のように，量的関係に固執し，「½着の上着」という使用価値の否定にのみ着目してマルクス価値形態論の全面否定を意図する説の皮相さが理解されるであろう。『初版』「本文」は上記の引用文の末尾に「原注(17)」としてS・ベィリー〔原文のJ・ベィリーはS・ベィリーの誤り〕に対する批判がある。S・ベィリーには，マルクスも述べるように，価値概念の否定および量的関係にのみ固執する点など宇野氏と共通する主張が多くみられる。

無断転載禁止。

も仕留めるのである。リンネルは，他の商品を自分に価値として等置することによって，価値としての自分自身に自分を連関させる。リンネルは，価値としての自分自身に自分を連関させることによって，同時に使用価値としての自分自身から自分を区別する。リンネルは自分の価値量——そして価値量は価値一般と量的に計られた価値との両方である——を上着で表現することによって，自分の価値存在に自分の直接的な定有とは区別される価値形態を与える。リンネルは，こうして自分を，自分自身において分化したものとして（als ein in sich selbst Differenzirtes）示すことによって，自分をはじめて現実に商品として，すなわち同時に価値でもある有用物として示すのである。(c)リンネルが使用価値であるかぎりでは，それは1つの自立した物である。これに反して，リンネルの価値は，ただ，他の商品・たとえば上着・にたいする関係のなかにおいてのみ（nur im Verhältniss zu）現われるのであって，この関係のなかでは，上着という商品種類がリンネルに質的に等置され，したがってまた一定の量において同等とみなされ，リンネルの代わりとなり，リンネルと交換可能なのである。それゆえ，価値は，使用価値とは区別された固有の形態を，ただ交換価値としてのそれの表示によってのみ，受け取るのである。」

上記の引用文のうち(a)の部分から価値表現のメカニズムについてつぎのことが述べうるであろう。

1）リンネルが自分と上着とに共通する同種の人間労働の・同じ価値実体の対象化である上着に連関する。すなわちリンネルは価値である上着に連関する。2）質的に，および量的にリンネルは上着を自分に等置する。つまり 1）でリンネルは上着を自分と同等なもの，価値とする 2）それを自己に等置する。

(b)の部分からはつぎのことがいえるであろう。上着への連関によってリンネルは「一石で何鳥をも仕留める」。すなわち「リンネルは，他の商品を自分に価値として等置することによって，価値としての自分自身に自分を連関させる。リンネルは，価値としての自分自身に自分を連関させることによって，同時に使用価値としての自分自身から自分を区別する。」

リンネルの上着に対するこうした連関の仕方は，実は，価値としての自分自身への連関である。「価値存在」なるものはこういう迂回をしないでは自分を表現できないものである。他への連関は自分への連関である。他へ連関することによってのみ価値は価値として表現され，同時に価値の担い手である自分自身の使用価値とは区別されるのである。

かくして「リンネルは自分の価値量……を上着で表現することによって，自分の価値存在に自分の直接的な定有とは区別される価値形態を与える」のである。リンネルはこうして自分を，自分自身において分化したものとして，すなわち使用価値でもあり同時に価値でもあるものとして,「現実に商品として」示すのである。リンネル商品は使用価値と価値との統一物であるが，具体的に有用物として，価値形態として自己を分割し表示するのである。

(c)の部分は(a)，(b)のまとめと上着の役割について述べている。リンネルの価値は上着に対する関係（Verhältniss）のなかにおいてのみ現れる。上着はこの関係のなかでは「リンネルに質的に等置され」，「一定の量において同等とみなされ」る。かくして上着は「リンネルの代わりとなり，リンネルと交換可能なのである」。価値は交換価値として表示されることによってのみ使用価値とは区別される独自な形態をもつのである。

以上のことを要約するとつぎのように述べうるであろう。リンネル商品は直接には眼にみえぬ自分の価値存在をつぎのように表現する。他商品上着に価値として連関し，価値としての上着を自己に等置し，それで自己の価値を表示するのである。こうしてリンネルは眼にみえぬ価値に具体的な定有形態を，価値形態を与えるのである。すなわち商品は自分自身を分化して，「眼にみえる価値」＝「交換価値」として，同

無断転載禁止。

時にまた有用な使用価値として示すことができるのである。他方，上着はリンネルに価値として連関づけられ，質的に等置され，リンネルの眼にみえる価値として，「リンネルの代わりとなり，リンネルと交換可能なのである。」

価値表現のメカニズムは，1）1商品が価値としての他商品に連関し，2）その他商品を自己に等置し，3）その他商品で自分を表示する，という三つの段階をふんで論理的には展開されているといえよう。

(3)　リンネルの価値形態とは何か？「上着がリンネルと交換可能である，ということである。」

「本文」ではいまだ相対的価値形態と等価形態という両極の形態上の区別が厳密になされているわけではない。だが，ここで等価形態の独自な性格について(2)の(c)につづいて述べている。

上着は「一つの新しい形態 (eine neue Form)」を刻印づけられる。すなわち，上着は保温のためとか，オシャレに役立てるためとかいうその生のままの自然形態が「他の商品との直接的交換可能性の形態 (die Form unmittelbarer Austauschbarkeit) を，一つの交換可能な使用価値の・あるいは等価物の・形態をもつ」のである。

「直接的交換可能性の形態」，「交換可能な使用価値の形態」，「等価物の形態」という三つのカテゴリーは同じである。そしてこの意味での「等価物 (Aequivalent)」という概念は単純に，価値が同等である，という意味のものではなくマルクス独自なものであるといえる。

だから，「等価物という規定は，商品が価値一般であるということを含むばかりでなく，その商品がその物的な姿において，それの使用形態において，他の商品にたいして価値として認められ，したがってまた直接に交換価値として他の商品のために存在している (da ist)，ということをも含むのである。」

ここに「等価物」が厳密に規定されている。この規定は古典経済学はもちろんのこと，マルクス自身の著作である『経済学批判要綱』，『経済学批判』，『剰余価値学説史』などにおいても厳密に論じられなかった全く新しい規定である。したがって「初版」『資本論』においてはじめて価値形態論が全面的にかつ完全に論究されていることがこのことからも論じうるであろう。

(4)　商品の価値は人間労働の結晶体 (Krystall) である。

「リンネルを人間労働の単に物的な表現として把握するためには，それを現実に物にしているところのすべてのものを度外視しなければならない。それ自身抽象的であってそれ以外の質も内容ももたない人間労働の対象性は，必然的に抽象的な対象性 (abstrakte Gegenständlichkeit) であり，1つの思惟物 (ein Gedankending) である。こうして亜麻織物は頭脳織物となる。」

ところで，「思惟物」であり，「頭脳織物」である価値は具体的な対象性をもたなければならない。すなわち価値であることを表示するためには，諸商品の物象的な諸連関のなかで (in ihren eignen sachlichen Beziehungen) 示さなければならない。リンネルの価値は人間労働の単に対象的な反射 (der bloss gegenständliche Reflex) であるが，その価値はリンネル自身の身体に反射されてはいない。それは何に反射されるのか？　他商品上着に反射されるのである。ではどのようにしてか？　リンネルが価値としての上着を自分に等置し，自分の価値形態とすることによってである。

「リンネルの価値は，上着にたいするリンネルの価値関係 (ihr Werth-Verhältniss) によって，顕現するのであり，感覚的な表現を得るのである。リンネルが価値としての上着を自分に等置しながら，他方同時に，自分を使用対象として上着から区別する，ということによって，上着は，リンネル一物体に対立するリンネル一価値の現象形態となり，リンネルの自然形態とは区別されるリンネルの価値形態となるの

無断転載禁止。　

である。」

この引用文の末尾につぎのような「原注(18)」がある。

「それゆえ，リンネルの価値を上着で表わす場合にはリンネルの上着価値（Rockwerth der Leinwand），それを穀物で表わす場合にはリンネルの穀物価値，等々と言ったりするのである。このような表現は，どれもみな，上着，穀物，等々という使用価値に現われるものはリンネルの価値である，ということを意味しているのである。」

この「注」は，「原注(22)」と一つになって『現行版』では，「B　全体的な，または展開された価値形態」の「1　展開された相対的価値形態」の「注(23)」へと位置が変更されている。そこではリンネルの価値は商品世界の無数の要素で表現され，他のどの商品体もリンネル価値の鏡（Spiegel）となるのである。

原注(18)に言う「上着価値」，「穀物価値」等々の表現は『初版』の該箇所では出典が明らかにされていないが，『現行版』ではS・ベィリーの著書『価値の性質，尺度および諸原因に関する批判的論究』からのものであることが示されている。S・ベィリーは「同じ商品価値の種々雑多な相対的表現〔穀物価値とか布価値とか呼ぶこと〕を指摘することによって，価値の概念規定をすべて否定しさったと妄信しているのである。」（1.Auflage, S. 24.）

ところで，マルクスは「原注(18)」で述べる「リンネルの上着価値」あるいは「リンネルの穀物価値」を分析し，価値表現の仕方および等価物商品の独自な役割について論ずるのである。それは価値実体に基礎づけられた価値概念からのみ説明されうるものである。ところが，S・ベィリーは前述の表現から価値概念の否定を導くのである。

さて，『現行版』では全体的な価値形態へこの注は移動しているが，問題の立てかたとしてはいずれの価値形態へも適用可能であろう。すなわち単純な価値形態の等価物商品の独自な役割に対しても，さらには全体的な価値形態の等価物商品の役割に対しても例解として意義をもつものである。しかし，「リンネルの上着価値」と言うように，商品の価値が表現される日常語の例解としては『初版』の位置で取り上げる方がより適切なものといえるであろう。その日常語の分析こそが重要なのである。

(5)　リンネル＝上着　において，上着は価値または労働凝固体（Arbeitsgallerte）としてのみ認められる。労働凝固体＝価値＝上着である。つまり「上着は，人間労働が凝固している形態として認められるのである」。使用価値の形態として認められるのではけっしてない。

ここに「原注（18a)」が付されており，人間ペテロと人間パウロの結びつき（関係）が上着商品のアナロジーとして引かれている。

「人間は最初はまず他の人間のなかに自分を映してみるのである。人間ペテロは，彼と同等なものとしての人間パウロに連関することによって，はじめて人間としての自分自身に自分を連関させるのである。しかし，それとともに，またペテロにとっては，パウロの全体が，そのパウロ的な肉体のままで，人間という種属の現象形態として（als Erscheinungsform des genus Mensch）認められるのである。」

この注は，『現行版』では，「a 相対的価値形態の内実」の末尾のつぎの文章の「注(18)」として生かされている。

「価値関係の媒介によって，商品Bの自然形態は商品Aの価値形態になる。すなわち，商品Bの肉体は商品Aの価値鏡になる。」（*Das Kapital*, Bd. I., S. 67.）

このように，『初版』および『現行版』ともに，等価形態の独自な性格について論ずるところでペテロとパウロが登場している。すなわち『初版』では，上着＝労働凝固体，『現行版』では，上着＝価値鏡　である。

さて，上着に上述のような形態が与えられるのはどのようにしてであろうか？『初版』はくり返しこの論点について述べている。

「使用価値上着がリンネル一価値の現象形態

無断転載禁止。

になるのは，ただ，リンネルが抽象的人間労働の，つまりリンネル自身のうちに対象化されている労働と同種の労働の，直接的物質化 (unmittelbare Materiatur) としての上着物質に自分を連関させているからにすぎない。上着という対象は，リンネルにとっては，同種の人間労働の感覚的につかまえられる対象性として，したがって自然形態における価値として，認められるのである。リンネルは価値として上着と同じ本質のもの (gleichen Wesens) であるがゆえに，上着という自然形態がこのようにリンネル自身の価値の現象形態になるのである。」

ここでも価値表現のメカニズムが明らかにされている。リンネルが自分の価値に対象化されているものと同種の人間労働の直接的物質化である上着に連関する。上着はリンネルにとって感覚的にとらえられる人間労働の対象性・価値として認められる。すなわちリンネルも上着も価値として「同じ本質のもの」であるから，価値として連関づけられた上着の肉体は「自然形態における価値」として認められるのである。

しかし上着をつくる裁縫労働は人間労働そのものではけっしてなく，一定の有用労働である。ところが，この裁縫労働が価値を形成する労働・抽象的人間労働そのものの実現形態となるのである。これはリンネルが上着に対して上述のように連関する結果にほかならない。

ところで，人間労働は具体的労働の具体性を度外視した労働一般であり，人間の労働力の単なる支出として「無規定 (unbestimmt)」である。人間労働は無規定であるが，《特定の有用労働——自然素材》という関係においてのみ具体的には存在する。つまり人間労働それ自体はどこにも具体的には存在しないのである。ヘーゲルの「概念」だけが外的対象なしに自己を客観化しうるのである。ところが上着をつくる裁縫労働は，リンネルとの関係においては，人間労働そのものとしてヘーゲルの述べているような「概念」の具体化となるのである。このパラグラフの末尾に「原注⒆」としてつぎのような ヘーゲルからの引用がある。

「概念は，当初はただ主観的であるだけであるが，外的な物質または素材を必要とすることなしに，それ自身の活動に従いながら，自己の客観化へと前進する。」（ヘーゲル『論理学』，367ページ，所収，『エンチュクロペディー，第1部，ベルリン，1840年』。〔岩波文庫版，松村一人訳『小論理学』，下，185ページ〕）

これは『小論理学』第三部「概念論」B「客観」の最初の「補遺」からのものである。「客観」は，自然や社会のあり方を機械的関係，化学的関係，目的的関係の順に考察している。ヘーゲルはそれを「概念の活動」＝客観の運動とみるのである。

⑹　裁縫労働は人間労働そのものとなるのであるがそれはどうしてであろうか？

「リンネルは，人間労働の直接的な実現形態としての裁縫労働に自分を連関させることなしに，価値または肉体化した人間労働 (incarnirte menschliche Arbeit) としての上着に自分を連関させることはできない。」

リンネルが裁縫労働に対して上述のように「自分を連関させる」からである。だから裁縫労働は目にみえる人間労働となるのである。リンネルが上着に「関心をもつ」のは，上着の「快適さ」とか，オシャレのためとか，というような必需品＝使用価値としての性質からではない。

リンネル＝上着　において，上着はリンネル価値の表現のためにのみ存在している。すなわち上着はリンネルの価値対象性 (Werthgegenständlichkeit) をリンネルそれ自身の使用対象性 (Gebrauchsgegenständlichkeit) から区別し，表現するためにのみ役立つのである。

だから，リンネルはその価値を上着以外の他の商品で表現しても，自分の価値を自分自身の使用価値から区別するという同様の目的を達したであろう。裁縫労働がリンネルにとって意義をもつのは，それが「人間労働一般の実現形態 (Verwirklichungsform) であり，対象化様式 (Vergegenständlichungsweise) であるかぎり

無断転載禁止。

においてのみのことである。」

では，どうして裁縫労働がそうした形態をもつのであろうか？　それはくり返し述べていることであるがリンネルによってつぎのように媒介されるからである。すなわち，リンネルが抽象的人間労働の直接的な実現形態としての裁縫労働に自分を連関させるからである。そうしないではリンネルは価値としての上着に自分を連関させることができないのである。

(7)　このパラグラフは価値表現の「軸点」をなす「回り道」について論じている重要な箇所なので全文を引用する。その構成部分は四つに分けられる。(a)〜(d)として区分けし論究する。

(a)「われわれはここで，価値形態の理解を妨げるすべての困難の軸点（Springpunkt）に立っているのである。商品の価値をその使用価値から区別すること，あるいは，使用価値を形成する労働を，単に人間の労働力の支出として商品価値で評価されるかぎりでの同じ労働から区別することは，比較的たやすい。商品または労働をまえの形態で考察するときには，あとの形態では考察しないし，あとの形態で考察するときにはまえの形態では考察しない。これらの抽象的な対立物（Diese abstrakten Gegensätze）はおのずからたがいに分かれるのであり，したがってまたたやすく見分けられうるのである。」

商品を分析的に使用価値として，あるいは，価値として考察することは容易である。さらに商品の二要因をそれらの実体にまで遡及して論ずることも容易である。商品または労働を一方の形態で考察するときは他方の形態を捨象しているからである。だから商品を分析的・一面的に考察し，その結果として得られた使用価値と価値という二要因および労働の二側面は「抽象的な対立物」である。それは具体的な対立物としての現実の商品の矛盾を論ずるための基礎の分析である。商品の二側面をそれぞれ考察し，両者を頭の中で区別されたものとして認識された「抽象的な対立物」である。だからその要素はおのずと理解されるものである。

「抽象的な対立物」という場合の「抽象的」とは，全体の一側面を「抽象」したもの，一面的なもの，あるいは分離されたもの，という意味である。これの考察は「価値形態論」以前で，『現行版』では第1章第1・2節で，すでに終えているものである。すなわち商品なるものを「価値抽象（die Wertabstraktion)」(Bd. I, S. 65.）と「使用価値抽象」との頭の中での，観念的な対立物の統一として把握する段階のことを述べているのである。

(b)　ところが，価値形態においては，商品を一面的に考察する上述の場合とは全く異なり，理解は極めて困難である。なぜだろうか？

「商品の商品にたいする関係（im Verhältniss）のなかにだけ存在する価値形態の場合はそうではない。使用価値あるいは商品体は，ここでは1つの新しい役割（eine neue Rolle）を演じるのである。それは商品価値の，つまりそれ自身の反対物の現象形態となる。同様に，使用価値に含まれている具体的有用労働が，それ自身の反対物に，すなわち，抽象的人間労働の単なる実現形態となる。商品の対立的な〔2〕規定は，ここでは，互いに分かれるのではなくて，互いに反省しあうのである（reflektiren sich……in einander)。」

リンネルの価値形態において等価物となる上着商品はその商品体そのものがその正反対物・価値の現象形態となる。また上着をつくる具体的有用労働がその正反対物・抽象的人間労働の実現形態となる。このように上着および上着をつくる労働はそれ自体をいくら分析してもけっして見いだされない独自な形態を与えられ，「1つの新しい役割を演じるのである。」

すなわち上着商品の肉体は使用価値であって同時に価値そのものである。だから上着商品には自分が本来もっている二要因のほかに独自な形態が与えられる。上着商品は，「自分固有の価値」+「自分固有の使用価値」+「他商品の価値の現象形態」すなわち「価値そのもの」，といういわば三つの要因をもつことになるのである。

無断転載禁止。

第三の要因はリンネルとの価値関係から生まれたものである。上着商品の肉体は使用価値であって同時に価値であるという一見すると極めて奇妙な事態にわれわれを直面させるのである。ここに商品を一面的に考察した方法では把握できない重要な問題が浮かびでてくるのである。

「商品の対立的な〔2〕規定は，ここでは，互いに分かれるのではなくて，互いに反省しあうのである。」

「反省しあう」とは，使用価値と価値が区別されるのではなく，使用価値は同時に価値であり，価値は同時に使用価値であるということである。両者の関係は互いに相手を予想し，媒介しあう関係，相互前提の関係である。ヘーゲルは相互前提の関係の論理学的な意義について「本質論」の「反省規定」で論じている注）。反省規定は「措定的反省」──→「外的反省」──→「規定的反省」へと展開される。ここでの「反省しあう」はさしあたり措定的反省に位置づけられるであろう。「反省しあう」関係の根拠はいまだ明らかになっていない。上着の使用価値が同時に価値そのものであるという根拠は以下において述べられるのである。

(c)「これは一見するといかにも奇妙に思われるが，立ち入って考察すれば必然的なものであることがわかる。商品は，もともと1つの二重物（ein zwieschlächtig Ding），すなわち使用価値および価値，有用労働の生産物および抽象的な労働凝固体である。それゆえ商品は，自分が商品なのだということを表示するためには，その形態を二重にしなければならない。使用価値の形態は，商品は生まれながらにもっている。それは商品の自然形態である。価値形態は，商品が他の諸商品との交わり（im Umgang）においてはじめて獲得するものである。だが，商品の価値形態は，それ自身がまた対象的な形態でなければならない。諸商品の唯一の対象的な形態は，その使用姿態，その自然形態である。ところで，1商品，たとえばリンネルの自然形態はその価値形態の正反対物なのだから，それは，なにか他の自然形態を，他の1商品の自然形態を，自分の価値形態にしなければならない。それは，直接に自分自身にたいしてすることができないことを，直接に他の商品にたいして，したがってまた回り道をして（auf einem Umweg）自分自身にたいして，することができるのである。それは自分の価値を，それ自身の身体で，言い換えればそれ自身の使用価値で表現することはできないが，しかしそれは，直接的な価値定有（unmittelbares Werthdasein）としての他のある使用価値あるいは商品体に自分を連関させることはできる。それは，それ自身のうちに含まれている具体的労働にたいしては，抽象的人間労働の単なる実現形態としてのこの労働に自分を関係させるということはできないが，しかし，他の商品に含まれている具体的労働にたいしてはそうすることができる。そうするためには，その商品はただ，他商品を自分にたいして等価物として等置しさえすればよい。1商品の使用価値が他のある商品のために存在するのは，まったくただ，それがこの他商品の価値の現象形態として役立つかぎりにおいてのみである。」

ここに前述の「反省」関係の根拠が述べられている。商品は使用価値と価値の二重物である。使用価値の形態は商品が生まれながらにもっている自然形態である。ところが価値はどのように捜してみてもその商品体のなかに直接見いだすことはできない。つまり商品の価値は自分の自然形態では表現されないのである。だが価値は自己の現象しうる形態をもたねばならない。「対象的な形態」をもたねばならない。それはどのようにして可能であるか。他商品との「交わり」においてのみ可能である。

この交わりにおいて価値がその「対象的な形態」を獲得する過程を理論的にとらえたものが価値表現の「回り道」の論理である。以下，価値表現の核心をなす「回り道」について論じることにしよう。

注）ヘーゲルの「反省規定」について詳しくは，見田石介『ヘーゲル大論理学研究』大月書店，1980年，第2巻，第1篇，第1章，C「反省」参照。

無断転載禁止。

商品は自分の価値を自分の使用価値で表現することはできない。価値の表現される形態をもつためには，他の1商品の自然形態を自分の価値形態としなければならない。そのためには「直接的な価値定有」としての他の商品に連関しなければならない。そして「直接的な価値定有」である他商品で自分の価値を表現するのである。つまり直接に自分自身の肉体で表現できないので，他商品の肉体を借りて，したがって「回り道」をして自分の価値を表現するのである。そのためには他商品を自分に同等なものとして，「等価物」として自分に等置すればよいのである。「連関」，「等置」にもとづく等価物商品の奇妙な性格の形成である。他商品は，この場合，使用価値として役立つためではなく，リンネル商品の価値の現象形態として役立つものとして「等置」されるのである。

「回り道」その論理は上述のとおりである。自分で直接にできないことを，他のものを媒介にして自己の目的を達成する方法である。価値表現の方法についてくり返し述べてきたことをここであらためて総括しているのである。

前述の商品の二規定の「反省」関係についてみると，価値表現の根拠はリンネル商品にある。その根拠は等価物商品・上着に媒介される。(b)でみた「反省」関係＝措定的反省の根拠と「回り道」による根拠の媒介とが示される。すなわち措定的反省（相互媒介関係）と外的反省（根拠）と両者の止揚としての規定的反省（「回り道」）である。したがって回り道は反省規定の三段階を考慮することによって理解が一層深まるといえよう。

(d)　さて，$x$量の商品A＝$y$量の商品B　という形態Iをその量的側面からのみ考察するならば，さきにみた〔前号，IIの3．相対的価値量の変動――参照〕諸法則をみいだすだけである。

「だが，もし両商品の価値関係をその質的な側面（qualitativen Seite）から考察するならば，われわれはこの単純な価値表現のうちに価値形態の秘密を，したがってまた，つづめて言えば貨幣の秘密を発見するのである。」

価値関係の「質的側面」を分析することが価値形態の秘密を解くカギとなるのである。これは上述の「回り道」に約言される理論によって論証されているといえる。

『初版』は上の引用文につぎのようなきわめて注目すべき「原注(20)」をつけている。

「経済学者たちが，もっぱら素材にたいする関心に影響されて，相対的価値表現の形態内実（Formgehalt）を見落したのは不思議ではない。というのは，ヘーゲル以前には，専門の論理学者たちでさえ，判断例と推理例の形式内容（Forminhalt）を見落したのだからである。」

この注の意味するところは何であろうか。私はつぎのように理解している。古典経済学⟶マルクスと形式論理学⟶ヘーゲルとを結びつける内的紐帯の一契機をなすものである。すなわち古典経済学は不充分ながら価値の実体を明らかにした。だが価値の形態についてはその究明はおろか問題をたてることさえできなかった。マルクスがはじめて価値形態論として問題を正しく提起し，20エレのリンネル＝1着の上着　という価値等式に含まれている価値表現の「形態内実」を明らかにしたのである。それは価値概念と価値形態との内在的関係の証明であるといえる。他方，ヘーゲルは伝統的な形式論理学の判断論および推理論の根本的欠陥を鋭く批判している。たとえば判断論を例にとると，バラは赤いものである　という感性的な判断は，形式論理学のように，植物の一種であるバラに表象における赤さが単に外面的に付加されて形成されるものではない。主語であるバラの一性質が述語において表現されているとみるのである。それはいわばバラの判断である。このようにヘーゲルは各種の判断形式に含まれている「形式内容」を明らかにし，概念から判断を展開し，諸判断を必然性の形式のもとに位置づけているのである。

マルクスは価値形態を価値概念からの必然的発生とみる。ヘーゲルは選言判断を事物の実体と形態との統一としての本質の判断とみる。価

無断転載禁止。

値形態論は選言判断の論理構造に対応しているといえよう。〔この点くわしくは拙著『価値形態論』第八章を参照されたい。〕

(8)　このパラグラフはこれまでの「分析」を総括している。すなわち一商品の相対的価値表現は二つの異なる価値形態――相対的価値形態と等価形態――を含むことを明らかにしている。リンネルはその価値を上着に対する「価値関係」において，交換価値として表示する。上着は「リンネルと直接に交換されうる使用価値の形態」，「等価物の形態」を受けとる。したがって，相対的価値形態と等価形態とは「交換価値の諸形態」である。両者は，同じ価値表現の「諸契機（Momente)」であり，相互に条件づけあう「諸規定」であるが，「等置された二つの商品極（Waarenextreme）のうえに分極的に（polarisch）配分されている」。

(9)　ここから主として等価形態の分析に向かう。「量的規定性は一商品の等価形態には含まれていない。」すなわち上着は等価形態＝「直接的交換可能性の形態」にあるが，等価形態は価値の量的規定を含んではいない。なぜなら上着は「等価物」としての使用価値であり，自分の価値量を表現する必然が全くないからである。上着それ自体はリンネル価値量を表現する材料として役立っているにすぎないからである。上着は単なる使用価値として存在するにすぎないのである。上着のリンネルとの交換比率は人間労働の量にもとづく価値量によって与えられているのである。それは等価形態には含まれていないのである。

なお「付録」ではこの点について詳細に論じられている。(S. 768―769.) 参照。特に「等価物（Aequivaent)」のもつ二つの意義すなわちa） 2商品が同等量の価値をもつこと＝等価であること　b） 等価形態の商品＝直接的交換可能性の形態にある商品　の区別は重要である。〔この点，拙著140頁。参照。〕

(10)　相対的価値形態と等価形態の区別は，単純な価値形態では不明瞭である。リンネル＝上着　は「逆の連関」で，上着＝リンネル　を含んでいる。この意味でリンネルも上着も等価物としての役割を演じうるからである。等価形態の商品が貨幣形態のように固定していず，いずれの商品もその地位に立ちうることから，両形態の区別は一見すると不明瞭にみえるのである。この点，『現行版』（S. 82.） 参照。「逆の連関」については，「付録」（S. 765―766.） および拙著第4章参照。

(11)　上着はリンネルとの価値関係においてのみ「等価物」である。この関係において上着は「イニシアティブ」をもつことなく，単に「受動的」にふるまっているにすぎない。「上着が連関のなかにあるのは，それが連関させられるからである。」だからリンネルとの関係から生ずる上着の独自な性格は上着の関与なしに存在するのである。それではリンネルはどのような「仕方」で上着に連関するのか。

「リンネルは，抽象的人間労働の感覚的に存在する物質化（sinnlich existirende Materiatur）としての，したがって現に存在する価値体（vorhandnen Werthkörper)注1) としての上着にみづからを連関させるのである。」したがって「上着の等価物存在（Aequivalentsein）はいわば，リンネルの反省規定（Reflexionsbestimmung)注2) にすぎないのである。」

ところが，事態は全く逆にみえるのである。上着はリンネルとの価値関係においてのみもっている「直接に交換されうる使用価値」としての規定性（Bestimmtheit） を，たとえば体を温めるというような本来もっている上着の属性（Eigenschaft）と同じように，リンネルとの関係を離れてももっているかのようにみえるのである。それは一方では上着がイニシアティブをもってリンネルに連関しないからであり，他方ではリンネルとの関係を離れても上着は上着であるからである。リンネルが上着に連関するのは，上着を何かのもの（etwas） にするためで

無断転載禁止。

はなくて，ただリンネル価値の表現材料として自然形態としての上着を等置するにすぎないからである。等価形態の商品の呪物性（Fetischismus）が相対的価値形態の商品のそれよりも一層きわだっていることの根拠がここにある注3)。

しかし形態Ⅰでは「この偽りの仮象（dieser falsche Schein)」はまだ確固としたものではない。なぜなら，リンネル＝上着　は「逆の連関」において，上着＝リンネル　であるからである。つまりいずれの商品も等価形態に立ちうるからである。

⑿　形態Ⅰの「逆の連関」を3点にまとめて論じている。二つの商品の等価性の表現では，(a)価値の表現が相手の商品に対して互いに反対の方向であるとはいえ，その形態の展開（Formentwicklung）は同じ度合（gleichmässig）である。すなわちリンネルは上着で表現し，逆に，上着はリンネルで表現するのであるから，リンネルも上着もともに相対的価値形態と等価形態とをとりうるのである。等式を逆にしても同じく形態Ⅰであり，価値形態の質的区別はなくてまったく同じものである。(b)さらに形態Ⅰは等式を逆にしても，互いに相手の決まっている同じ一つの商品で表現する価値形態であるから，それはどちらの商品にとっても「統一的（einheitlich)」である。しかし「逆の連関」によってなされる二つの価値形態は双方の商品にとって「二重（doppelt)」であり，互いに異なるものである。(c)したがって双方の商品はそれぞれ他方の商品に対してのみ等価物である。つまり個別的な等価物（einzelnes Aequivalent）である。なおこれらの論点はのちにみるように形態Ⅲの(5)でも論じられている。(S. 28—30.）参照。

⒀　形態Ⅰの「不充分性」と形態Ⅱへの移行の可能性を述べている。リンネル＝上着　という等式は「明らかに，商品の価値をまったく限られたもの，一面的なもの（beschränkt und einseitig）として表現するだけである。」これは不充分性の指摘である。そこで「もし」リンネルを上着だけでなく，他の諸商品と「比較する（Vergleiche)」ならば，リンネル＝コーヒー，リンネル＝茶　というような諸等式を得る。リ

---

注1）「価値体」という概念は，『初版』「本文」ではこの箇所にのみ登場する。この概念の独自な意義については詳細な検討を要するが，ここで用いられているように，「抽象的人間労働の感覚的に存在する物質化」，あるいは，(7)でみた「直接的な価値定有」，あるいは，(3)でみた「等価物」と同義であろう。また「付録」および『現行版』で登場する「価値鏡」とも同義であろう。「価値体」は等価形態の商品の独自な性格について規定した概念といえるであろう。なお「価値体」は「付録」では7箇所，『現行版』では6箇所にわたって登場している。これらの点について検討を加えた論考として，望月俊昭「『価値形態』に関する一考察」（成城大学『経済研究』67号，1979年）がある。

「価値物」と「価値体」の概念規定についてはつぎの諸論考を参照されたい。浅野敞『個別資本理論の研究』第2編，第3章「個別資本と生産関係の対象化」ミネルヴァ書房，1974年。山本広太郎「単純な価値形態について」，『経済学雑誌』第76巻第3号，1977年。久留間鮫造『貨幣論』大月書店，1979年，93-100ページ。富塚良三「価値表現の『回り道』の論理と交換過程の矛盾」，『講座・資本論の研究』第2巻，青木書店，1980年，所収。

注2）「反省規定」は，王と臣下の関係を例にとって「原注(21)」でも触れているように，マルクス独自なものである。この観点は商品，貨幣，資本の「呪物性」批判へつながっている。この注は『現行版』では等価形態の第1の特性の論究の「注(21)」となっている。

なお価値形態は相対的価値形態の商品の「客観的な反省関係」であるとする見地から検討を加えた労作として，藤本義昭「価値形態の秘密について」（『大阪市大論集』第30号，1978年）があるので参照されたい。

注3）商品の呪物性とその批判は，いわゆる「物神性」論において展開されているが，価値形態論においても等価形態の「偽りの仮象」批判という仕方で「呪物性」が論じられている。特に「付録」では，「等価形態の第4の特性」として，『現行版』の「物神性」の中心論点の一つが究明されている。(S. 773-775.）参照。

無断転載禁止。

ンネルは自分以外の諸商品と同じ数の諸等式をもつこととなり，新たに現われる商品の数とともにその等式は増加する。これは形態Ⅱへの移行の可能性を述べており，「もし……ならば」という仮言判断の形式が用いられている。形態Ⅱから形態Ⅲへの移行にも共通する論理である注)。このパラグラフの末尾に「原注(22)」として，S・ベィリーの著からの引用とそれへの批判がある。(4) を参照。

(14) 形態Ⅱは「同じ商品の価値に対して，相対的な諸表現のきわめて雑然とした寄木細工(Mosaik)を与える」。しかしこの形態においても，価値量の表現にとって何らかのものが得られたようには見えない。というのは20エレのリンネルの価値量は，形態Ⅱと同様に，形態Ⅰにおいても「十全に」表現されているからである。また等価物の形態規定(Formbestimmung)にとっても何らかのものが得られたようには見えない。というのは形態Ⅰの上着と同様に「個別的な等価物」であるにすぎないからである。このように形態Ⅱは価値量の表現と等価形態からみて形態Ⅰと何らかわるところがないのではないか。新しい進展は何もないのではないかと反問している。

なお「雑然とした寄木細工」は，「付録」および『現行版』では形態Ⅱの欠陥規定に入っている。

(15) しかし，形態Ⅱは，形態Ⅰに対して，「本質的な進展 (eine wesentliche Fortentwicklung) を内蔵している。すなわち，この形態のなかに蔵されているのは，ただ単に，リンネルがその価値をたまたまあるときには上着で表現し，あるときにはコーヒーやその他のもので表現する，ということだけではなくて，リンネルがその価値を上着で表現するとともに (sowohl……als) コーヒーでもその他のものでも表現し，この商品でか (entweder……oder)，それともあの商品でか，それともまた第三の商品，等々でか表現する，ということである。このさらに進んだ規定は，相対的な価値表現のこの第二の，または展開された形態がその関連 (Zusammenhang) のなかで示されさえすれば，明らかになる。」

形態Ⅱは，形態Ⅰに対して，1商品の価値をすべての他商品で表現する価値形態である。すなわちリンネル商品の価値は上着でも，コーヒーでも，その他のものでも表現し，さらには上着でか，コーヒーでか，その他のものでか表現する。このように，形態Ⅱは，その表現様式を形態Ⅰと対比してみれば，さらに進んだ規定は明らかである。ところで形態Ⅱはヘーゲル判断論の選言判断の表現様式に最もよくあてはまる価値形態である。つまり „sowohl……als“ (同一性の表現)であり，„entweder……oder“ (区別の表現) である。選言判断は必然性の判断の 1) 定言判断 と 2) 仮言判断 との統一であり，事物の概念 (本質) が述語において表現される判断である。価値概念と価値形態との関係はその「形態内実」からみるならば選言判断が最もよく妥当するものといえる。マルクスは形態Ⅱについて特にこの表現様式を用いている。なお『現行版』ではこの叙述は存在しない。

注)「本文」は，上述のように，形態Ⅰから形態Ⅱへの「展開・移行」を形態Ⅰの不充分性と形態Ⅱへの移行の可能性とによっておこなっている。『現行版』では形態Ⅰの「不充分性」はそれが「ほかのすべての商品との商品Aの質的な同等性と量的な比率性とを表示するものではない」ということにある。形態Ⅱへの「可能性」は形態Ⅰが商品Aに対する第2の商品がどんな種類のものであってもよいということにあり，「おのづとより完全な形態へ移行する」のである。(*Das Kapital*, Bd. I., S. 76.)「付録」ではこの点詳しく論じている。(S. 776-777.) 参照。

## Ⅱ．相対的価値の第2の，または開展された形態

Ⅱ．は4つのパラグラフから成っているが，「付録」，『現行版』のような区分けはなされていない。「付録」では §.1. から §.5. まで，『現行版』では 1. から 3. まで「見

無断転載禁止。

出し」によって区分けされている。「本文」では形態Ⅱの肯定面が主として取り上げられ，形態Ⅱの「欠陥」は述べられていない。

前述の〔Ⅰ.〕の⒀，⒁，⒂を前提して形態Ⅱの本格的な論究に入いる。はじめに形態Ⅱの価値諸等式が示される。諸等式は（oder）〔隔字体〕によって結ばれている。ここに登場する商品は，リンネル，上着のほかに，「コーヒー」，「茶」，「鉄」，「小麦」がある。「付録」および『現行版』では，上記のほかに，「2オンスの金」が登場している。以下において，〔Ⅰ.〕でみたように，各パラグラフごとに検討しよう。〔⑴～⑷と記号を付しておく。〕

⑴ 形態Ⅰが形態Ⅱの「基礎的要素（Grundelement)」をなしている。逆に，形態Ⅱは形態Ⅰの「総計（Summe)」（S.777.）である。

⑵ 形態Ⅱの形式からみて，諸商品の量的な交換関係を規制する背景があらわになってくる。形態Ⅰでは，二商品の交換比率は二人の個人的な商品所持者の「偶然的な関係」のようにみえることがありうるが，形態Ⅱでは一商品の価値量が多数の商品で表示されても同じであることから，「交換が商品の価値量を規制するのではなくて，逆に，商品の価値量がその交換関係を規制する，ということが明らかとなる。」〔Ⅰ.〕の⒁参照。

⑶ 形態Ⅱの価値の量的関係の論究につづいて，「質的側面」が考察される。二商品の等価表現，リンネル＝上着 において，上着体はリンネル価値の現象形態であり，裁縫労働は人間労働の現象形態として認められていた。その場合，リンネルを作る織物労働は，上着を作る裁縫労働に等置され，織物労働は人間労働という点で裁縫労働と同種の労働として規定された。しかしこの規定は形態Ⅰでは異なる二つの労働のあいだにおいてのみ妥当するものであり，明確に表示されているものではなかった。

だが，形態Ⅱでは，リンネルの価値等式の無限の系列において，リンネルに含まれている労働は，他のどの労働とも同等と認められる労働として明示的に表現されているのである。したがって「リンネルの価値は，ここではじめて，真に価値として，すなわち人間労働一般の結晶として表示されているのである。」

⑵，⑶ともに，形態Ⅱの形態Ⅰに対する「本質的な進展」を論じているといえよう。

「付録」および『現行版』では，リンネル商品が「商品世界」の「市民（Bürger)」として「商品世界に対して社会的な関係（gesellschaftlichem Verhältnis）に立つ」（*Das Kapital*, Bd. I., S. 77.）というように叙述がより理解しやすく改善されている。

⑷ 形態Ⅱから形態Ⅲへの移行を示している。すなわち形態Ⅱは形態Ⅰの諸等式の合計から成っている。ところで，形態Ⅰの等式はそれぞれ「逆の連関」で逆の価値等式を含んでいる。したがって形態Ⅱを構成するすべての価値等式も，同様に，逆の価値等式を含んでいる。かくして逆の連関にされた形態Ⅱすなわち形態Ⅲという価値形態を得るのである。

形態Ⅱの考察で特徴的なことは「欠陥」規定がないことである。形態Ⅰでは「不充分性」と「可能性」によって形態Ⅱへ移行したのであるが，ここでは「逆の連関」のみでつぎの形態へ移行しているのである。「付録」および『現行版』では「欠陥」規定が厳密に規定され，逆の連関と一対となって形態Ⅲへ移行するのである。（つづく）

1980年7月17日

無断転載禁止。